

3. 我が国における板鰓類資源の保全と管理 沿岸性板鰓類資源の現状と管理 山口敦子（長大水）

日本沿岸各地には多種多様な板鰓類が生息しており、一部の種や地域を除いて主に混獲物として様々な漁業により漁獲されている。一般に、沿岸性板鰓類の経済的価値は高いとはいえず、資源の減少が危惧されているにも関わらず、何れの種がどこで水揚げされているのかを知ることや、資源量を推定するのは困難な状況である。加えて、板鰓類各種の生物学的情報は極めて不足しており、沿岸域には種判別ですら困難な種も存在している。

この講演では、日本各地の沿岸域で漁獲されている板鰓類の現状とその利用状況に関するこれまでの調査結果を紹介する。次に、有明海を例にとり、板鰓類の漁獲の現状と問題点、保全に関する今後の展望について述べる。

1. 日本沿岸の板鰓類の漁獲と利用の現状

日本の沿岸域における板鰓類の漁獲、水揚げと利用の現状を明らかにすることを目的とし、1999年～2001年にかけて日本全国123カ所の漁港で漁獲物の調査と聞き取り、またはアンケートによる調査を実施した。この調査の結果、全国的にもっともよく漁獲されている沿岸性の板鰓類は、アカエイ類、ホシザメ類、ガンギエイ類であることがわかった。漁獲された場合、板鰓類は船上で投棄されることが多いが、投棄されることなく広く利用されているのは、アカエイとホシザメであった。逆に最も投棄されることの多い種類はイトマキエイ、トビエイ、ネコザメ等であったが、逆にこれらを珍重している地域もあった。一般に、水揚げされた大型のサメ類をフカヒレや練り製品として、またエイ類を惣菜用として利用することが多い傾向が見られた。東日本では特定の種類のみを日常的

に利用するが、西日本では種類にこだわらず広く湯引きで食べる傾向があり、地域の食文化とも深い関わりがあることがわかった。

2. 有明海における板鰓類の漁獲の現状と問題点および保全について

有明海は、長崎、佐賀、福岡、熊本の4県に囲まれた九州最大の内湾である。最大6 mにも及ぶ潮位差を持つ干潟の海として他の内湾には見られない特徴を持ち、高い生物生産力を誇ってきた。有明海では、貝類漁業やノリ養殖が中心となっているが、板鰓類を主な対象とした漁業も古くから行われてきた。しかし、2000年以前の板鰓類の分類・生態・資源に関する研究は皆無に近く、板鰓類に関する種別の統計はないため、漁獲されている種類についても把握されていなかった。そこで、演者らは2001年から魚類相に関する調査を開始し、これまでに有明海全域から9科12属19種の板鰓類の出現を認めている。

有明海ではアカエイ類等の板鰓類が資源として重要である一方で、ナルトビエイや一部のサメ類が漁業にとって有害な生物であると考えられている。ナルトビエイは、春から秋にかけて有明海の浅海域に来遊し、二枚貝類を摂食する。このエイ類の増加が二枚貝類漁業の不振と結びつけて考えられるようになり、2001年以降本格的に駆除されるようになった。

この講演では、有明海で漁獲されている板鰓類とそれらを取り巻く諸問題について紹介し、漁業と保全の両立を実現するための今後の展望について考察したい。